

邪馬壹国の官職名について

邪馬壹国研究会・松本 鈴岡潤一

はじめに

本稿の目的は、「東夷伝全体がなにを記述しようとしたのか」を明らかにすることである。今回の講座のテーマである『邪馬台国はなかった』の関係する論点でいえば、「会稽東治」でなければならないということである。

発端は、かねてよりの『魏志倭人伝』に関する疑問、なぜ幻の「夏」王朝が登場するのか、なぜ「觚」を含む難読語が官職名として登場するのか、だった。

疑問がほぐれ始めたのは、正木さんの講演を聴くことで「觚」は「杯」と知ったことだった。ついで、『倭人伝』のみで終わらず、倭人伝を含む『東夷伝』として読むことによってだった。

併せて、近年、紀元前後頃の遺跡出土品の中に「硯」がある、という確認が続いたことから、紀元前後当時、従って、3世紀の卑弥呼の時代においても、文字を使用していたことが確実となったことだった。以下、まず「觚」をめぐる問題について、次いで「夏」王朝をめぐる問題について、議論を進めたい。

1) 「觚」とは何か

『倭人伝』には、「觚」が三種類あり、官職名として使用されている。どういう読みであるのか、どういう意味であるのか、説明はない。しかし、倭人伝以前の『東夷伝』には、「觚」はないが「爵」があった。こちらは、身分秩序に関する礼儀作法の用具として登場している。

「東夷」の最初が「扶余」である。その風俗の最初に次の記事がある。

「拜して爵を受け取り、洗って爵を返し、挨拶をし先を譲り合って堂の登りおりをする [という中国の古代の礼が] 行われている。殷の暦の正月の月に天を祭り、…

この時に裁判の判決が行われたり、囚徒の釈放が行われたりする。国内では着物は白色のものが上服とされ…」(ちくま学芸文庫版『正史三国志4』p.444)

「爵」を受け取るに「拝して」とはどういうことだろうか。白川静の『字統』によると、「爵」は「礼器」といい、説明末尾には「古く爵酒をもって恩賞とし、それより爵位、五等の爵制を生じた」としている。諸橋轍次の『大漢和辞典』によれば「爵」は「酒器の総称」であり、諸侯の拝謁に際して天子が杯を賜ったことから位を意味するとある。

扶余においては、「爵酒をもって」「拝して」「挨拶」とし、相互の「敬意」の表現としたのであろう。陳寿が「着物は白色が上服」と付記したのも、「古く」「殷周」に遡るべき礼法が、扶余や倭人社会において行われていることを「発見した」のである。

「扶余」において「爵」を、そして「倭人社会」において「觚」を「発見した」というのが、まず最初の確認である。

「商早期」の「觚」を、上海博物館印刷の図録で見ることができる。



「商早期の獸面文爵」と「商早期の獸面文觚」（上海博物館『中國古代青銅器』1995より）

『倭人伝』においては、「泄謨觚」「柄渠觚」「兕馬觚」であるが、その字義に則するそれぞれの具体的形態についての確認は難しいが、「觚」は「觚」であると考えざるほかあるまい。伊都国の副官、奴国の長官が「觚」であるのは、伊都国、奴国の上位に位置する「女王国」

= 「邪馬壹国」王が伊都国、奴国に授けたものであろうか。もしくは、「古」の時代に殷周王朝から伊都国、奴国それぞれに賜った官位としての「觚」を大事に保存した、ということであろうか。いずれにしても、倭国（邪馬壹国）には、「泄謨觚」「柄渠觚」「兕馬觚」という語彙があったのである。

では、魏使は、どのようにしてこれらの字面を知ることができるであろうか。官職であるとすれば、魏使が勝手に音訳したと考えることはできないであろう。「觚」の現物があつたのであろうか。仮に青銅器の現物が官職に対応して存在し示されたとして、その形態から「泄謨觚」「柄渠觚」「兕馬觚」の字面を直ちに想起することができるだろうか。

『論語』に、「觚不觚」という語句がある。貝塚茂樹訳注（中公文庫）によると次のように訳す。

子曰、觚不觚、觚哉、觚哉、

「觚の酒杯も本来の觚の形でなくなった。これが觚であろうか。これが觚であろうか」

「觚という古代の酒杯が、本来の形を失ってしまったということから、古代の礼の退廃を嘆いた。しかし、孔子時代の觚が古代の觚とどう変わっていたのか、いろいろの説があつてよくわからない。」（『論語 第六 雍也編』 25節）

仮に殷周時代の現物があつたとして、それが「觚」であると判つても、「泄謨觚」「柄渠觚」「兕馬觚」である、と知ることは、魏使にとっても、容易なことではないに違いない。また、孔子時代に觚の形が変わっていたとすると、作り変えられた邪馬壹国時代の何世代目かの觚は、どのようなものになっているだろうか。

現物ではないとすれば、言葉である。「泄謨觚」「柄渠觚」「兕馬觚」を音声で伝えることは難しいのではないか。しかし、文字を使用していた、と考えることができれば、問題は解決する。近年の「弥生時代の硯」の発見は、こうした思考回路を可能にするだろう。そして、魏使は、語彙としての「觚」の多様な存在に驚嘆し、夏殷周時代の中国の「徳治」に思いをいたし、感激したであろう。

大人と下戸という階層差があるが、「大人や敬うべき人物に会ったときにも、ひざまずいて拝する代わりに、拍手するだけ」と書く。「拍手」とは、今日も神社の前でする所作であろうか。訳注は、この所作を、「古の遺法」と説明する。続けて、宗族間の尊卑について説

明し「それぞれ序列があって、上の者のいいつけはよく守られる」とするのは、礼法や上下身分に関する秩序が、かつて中国社会に存在したものを倭人たちが受け継いでいて、好感が持てることを表現しているのであろう。

それは、魏という国が、戦国期から秦漢帝国へと動揺した中国社会について否定的であり、殷周、さらにはそれ以前の「夏」への憧憬の表出として、祭天の儀礼を尊重し、暦を夏の時代のものに替えるという姿勢をもっていただけからであるように思う。

2) 『東夷伝』を読む

1 東夷伝・序文

そうした視点で、『東夷伝』を見てみよう。「扶余」について書き始める前に次の一文がある。要約して示す。

舜帝の時代から周代にいたるまで、「九服の制度」下にある中国統治の地域はもちろん、その周辺である「荒服」のさらに彼方からも使者が来る状況にあった。使者が来ることはあっても中国から使者を派遣することはできなかった地域について、西は前漢代の張騫が情報をもたらしたが、東は公孫氏の存在が道を閉ざして困難だった。

しかし、景初年間に公孫淵を誅殺し楽浪・帯方を掌握することで、通じるようになった。東方の大海のさらに遠方の情報も得て、「太陽が昇るところの近く」の国々をも「くまなく観察してまわり」記録する。

「これらは夷狄の国々ではあるが、祭祀の儀礼が伝わっている。中国に礼が失われたとき、四方の異民族の間にその礼を求めるということも、実際にありえよう。それゆえこれらの国々を順々に記述し、それぞれの異なった点を列挙して、これまでの史書に欠けているところを補おうとするのである。」（ちくま学芸文庫版『正史三国志4』p. 442～3）

「中国に礼が失われた」が、「四方の異民族の間に礼を求める」ことができる、という認識が、この『東夷伝』のコンセプトであると書いている。朝鮮半島諸国についての記述が

粗雑とはいえないが、「倭人伝」は丁寧である。その丁寧さを感じさせるのは、景初年間に
関する記事である。

以下、多少の解釈を含めて、朝鮮半島の政情にも触れつつ、東夷の礼を取り出してみよ
うと思う。

2 扶余

東夷の最初に取り上げられるのは「扶余」であるが、その西は鮮卑と接するというので、
むしろ「満州」に広がるイメージであろう。

「爵」を用いる「その国の老人たちは、自分たちは古の中国からの逃亡者だといってい
る」。

3 高句麗

東夷たちの言い伝えでは、高句麗は扶余の別種との事であり、言語などにおいて共通す
る。

高句麗では、鬼神を祭るが、星まつりや社稷（土地神と穀神）も祭る。10月には天神を
盛大に祭る。

埋葬の礼は盛大で、金銀財貨は葬礼のために使い尽くされる。石を積んで墳丘を作る。
五部族のうち今日、王を出すのは桂婁部である。公孫氏を支持したこともあるが、景初2
(238)年の司馬懿の公孫氏討伐には、魏に与した。

（ここでは余談であるが、日本列島上の高句麗系の遺物について触れたい。キト
ラ古墳の天体図は、奈良盆地での観測によるものではなく、もっと高緯度の、朝鮮
半島でいえばソウル以北での観測であると判断されている。（『高句麗壁画古墳の
旅』p.83）また、出雲市西谷墳丘墓群には、四隅突出型墳丘墓に埋葬後建てられた
柱穴をもつものがある（『出雲王と四隅突出型墳丘墓』新泉社刊）。「信濃国の外徙6
位下卦婁真老」らが賜姓申請を行ったことが記録されている（『続日本紀』799（延
暦18）年12月）。）

4 濊

殷末の箕氏は、紂王に諫言したが容れられず、殷が滅亡し周が興ると、朝鮮に移動し、高句麗の南に箕氏朝鮮を建てた。住民を教化して、泥棒がない国とすることができた。その四十数代目の子孫である準は、王を僭称していたが、秦末の陳勝の乱を避けた漢民族一万余が朝鮮に避難し、その一人燕出身の衛満は、一時朝鮮を統括した。漢の武帝が朝鮮に出兵して衛満の朝鮮を滅ぼして朝鮮四郡を置くと、単単大嶺以西は楽浪郡の直接支配下にあり、単単大嶺以東に住む濊族は、後に自立した。漢末になると高句麗の支配下となり、古老たちは、自分たちは高句麗と同族だと云い伝えているというようになった。星占いにも通じている。

正始6（245）年には、単単大嶺以東の濊が高句麗の支配下に入ったことに対し、楽浪太守劉茂と帯方太守弓遵は兵を向け、降伏させて朝貢させた。それ以降、この国の王を「不耐濊王」と呼ぶ。

5 韓

この地域の多様さに応じて、細目を設け説明している。ここについても、解釈を含めて要約して示す。

韓全体または馬韓

「韓は、帯方郡の南にあり、東西は海で限られ、その広さは縦横四千里ばかりである」というので、朝鮮半島南半部領域のすべてを含んでいる。また、南部海岸線の辺りにか倭の領域があることも語っている。

秦末ころ、衛満の攻撃を受けた箕氏朝鮮の末裔である準は、海に逃れて韓に入り、韓王を僭称した。王統は絶えたが、「韓」の祭祀を続ける後継者はいるという。

単単大嶺以西にいた濊族の「韓濊」は、後漢の桓霊のころ強大化し、その配下から逃れる民が韓国に流入した。建安年間（196～220）には、公孫康が楽浪の南に帯方郡を作り、兵を起こして韓濊を討伐した。以後、韓と倭が帯方郡、すなわち公孫康の支配下に入った。

しかし、景初2年には公孫氏は滅ぼされ、帯方郡は洛陽・魏王朝が統括する。こうした事態の転換への倭国の対応はどうだったのか。

景初2（238）年春正月、詔書を下して大尉の司馬宣王に軍隊を統率させて遼東を攻撃させた。

丙寅の日（9月10日）司馬宣王が、襄平において公孫淵を包囲し、大いにこれを撃ち破って、公孫淵の首を都に送り届け、海東の諸郡は平定された。（『魏書』明帝紀『正史三国志1』ちくま学芸文庫より）

景初2年6月、倭の女王、大夫の難升米らを遣わし、郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。太守劉夏、吏を遣わし、率いて送りて京都に詣らしむ。その年12月、詔書して倭の女王に報じて曰く…（『魏書』倭人伝『俾弥呼』古田武彦著より）

この間の事情を「東夷伝序」は次のように要約している。

景初中、大いに師旅を興し、淵を誅す。また軍を潜め、海に浮び、楽浪・帯方の郡を収め、而る後、海表謐然、東夷屈服す。（『魏書』東夷伝序『俾弥呼』古田武彦著より）

景初2（238）年には、明帝の命により、陸路司馬懿（仲達）の軍が公孫淵を討伐し、他方、帯方太守劉昕と楽浪太守鮮于嗣に命じて、海路侵攻して両郡を平定した。

「東夷伝序」は、文脈上は「淵を誅す」と「楽浪・帯方を収め」を「また」で結んでいる。けれども、この記述順序は、必ずしも時間順序を示さないかもしれない。

魏の詔書が、難升米と都市牛利の名を記し、「途中苦勞を重ねた」とねぎらうのは、破格である。また、俾弥呼の遣使が景初2年6月であると明記していることの意味するところは、難升米と都市牛利が、何らか「戦争に関与したこと」を示したかったからではないだろうか。端的には、正月に起動する司馬懿の軍事行動に連動し、海を知る倭の水軍が先導して楽浪・帯方攻略に貢献し、6月までには、その軍事行動は完了していたのではないかと考える。こう考えると、魏の詔書が素直に読めるように思う。

韓に関しては、景初2年の公孫淵討伐という支配権の交代とともに、楽浪郡が辰韓八国を併合させようとする反乱がおこり、帯方太守弓遵が戦死するほどの戦闘だったが、魏軍が勝利して韓は解体された。

「彼らの間の統治機構は未発達」というのは、馬韓だけではなく、辰韓・弁韓についても及ぶかもしれない。

韓の風俗にも、古来の中国に通じるものがある。五月に種まきが終わってから、また、秋の農作業が終わった十月に、鬼神の祭りが行われる。その中には、中国の鐸舞に似たものがある。また、天神も祭る。

辰韓

辰韓は馬韓の東方にある。「秦の労役をのがれて韓の国へやって来たとき、馬韓がその東部の土地を割いて与えてくれた」と伝える。

辰韓では、古老たちが代々いい伝えるところでは、自分たちは「古（秦末）の逃亡者」の子孫ということである。言語でも、「国のことを邦といい、弓のことを弧といい、賊のことを寇といい、行酒（さかずきを回して順々に酒を飲む）ことを行觴といい、…秦の人の言葉と似た点があって、燕や齊の地における物の呼び名と共通点があるというだけに留まらない。」という程度に中国風の文化がある。辰韓は元六カ国だったが、わかれて12カ国となっている。

また、辰韓12カ国を束ねるのは「辰王」であるが、辰王には、馬韓の者しか就くことができない。その事情は、「逃亡者」に土地を与えたのが馬韓だからである。ただ、「辰王」は「辰韓」に対応すると思われるが、「韓」の記事の冒頭にある「辰韓」について「古の辰国」というだけで「辰国」に関する説明は見当たらない。

弁辰

「弁韓」の項はないが「弁辰」がある。「弁辰は、辰韓の者と住む場所が入り組んで」とある。嶺南地方を指すのだろうと考えられる。後の区分でいえば、新羅と加耶諸国を包括する地域である。居住地の周りに城郭を作ること、衣服、住居、言語や掟が両者似て

いるが、鬼神の祀り方には違いがあるという。弁辰12カ国といったのちに、弁韓と辰韓併せて24カ国といたりするが、「土地は肥え、人々は蚕桑をよくする」のは24カ国に通じるだろうか。弁辰12カ国はそれぞれ「王」を戴くとある。「大きな鳥の羽を死者に随葬する」のは古墳出土の冠飾に反映しているだろうか。

辰韓と弁韓について特筆すべきは、鉄を産出することである。「韓・濊・倭はそれぞれここから鉄を手に入れている」とあり、さらに特に「弁辰瀆盧国」は、倭と接するとある。この程度に限定して「接する」倭は、弁・辰を24カ国で分割したのと同程度の広がりを持つ領域と考えられる。

3) 倭人について特筆する点

「古より以来、その使中国に詣るや、みな自ら大夫と称す」

ここにいう「大夫」とは、周代まで行われた貴族の称号である。倭人がそれを使うということは、周代以前に中国と通交していたことを現わす。

そしてその後に「夏后少康」が登場する。夏后少康がその子を「会稽」に封じ、「断髮・文身」により蛟龍の害を避けることを教えたという。「教える」ことが「会稽東治」である、という文脈である。教えられた「黥面文身」が倭人の習俗として「今日」に残っていることに感嘆しての表現が「当に会稽東治の東に在るべし」である。

さて、「夏・殷・周」という三代が「古」であるが、ここに「夏后少康」すなわち「夏」王朝が登場するのはなぜだろうか。冒頭、「觚」について論じた際に、暦を「夏王朝」使用のものに替えたことを見た。魏の君主が「夏」に対するある種の憧憬を持っていた、ということである。

ここで、皇帝本紀によって「夏への憧憬」を取り出せるだろうか。

ずばり、「三少帝紀」には、嘉平6（254）年の変事が記録されている。9月19日大將軍司馬景王が皇太后にはかって、明帝を継承した皇帝芳の廃位を実行した。その理由は、人倫に悖る行為を繰り返すからである。

「皇帝芳はすでに成年に達しているのに、政治にたずさわらず、気に入りの婦人に耽溺して、女色に沈淪し、…人のふみ行うべき秩序を打ちこわし、男女の節度を乱している。孝養と恭順は日々に失われ、道理に悖る傲慢さはますますはなはだしくなっている。…」(ちくま学芸文庫「三少帝紀」『三国志1』p.309)

代わりに皇帝となるのは、高貴郷公である。若い時から学問を好み、指名された後も、洛陽の太極殿で即位するまでは臣下の礼をとるほどで、信頼される皇帝となった。即位して、正元と改元した。256年の2月9日に関する裴松之の注がある。

臣下を招いての2月9日の宴会の際に高貴郷公が礼法制度について下問し議論したとある。そこで、高貴郷公は、諸皇帝の優劣を論じ始める。夏后少康と漢の高祖を比較しどちらが優れているかを論ぜよという。長い注であるが、結論は、「少康は禹の功績を復活し、以前の制度を失わず、聖天子の事業をそのまま受けつぎ、昔の礼法にそむかなかつた」と高貴郷公が述べたことに群臣が従ったことを示している。「禹の功績」には「会稽東治」がある。

続く4月10日にも、「帝は太学に行幸し」「易」『礼記』などについて、「儒者たちに質問し」た。議論が多岐にわたっているが、陳寿は、議論の内容にまで踏み込んで採録し、「三王(夏の禹王、殷の湯王、周の文王)の時代に礼によって統治をおこなった」ことを、本文に記述している。要は、高貴郷公が「夏」王朝を重視し、とりわけ「夏后少康」の礼に従う統治を評価していると読み取ることができる。

そうであってみれば、『魏書』の末尾を飾る「倭人伝」においても、「夏后少康」の「会稽東治」で締めくくろうというのが、陳寿の編集意図だった、とっていいのではないか。

まとめ

こうしてみても、こうして来ることによって、「倭人伝」が陳寿すなわち魏にとって、貴重な存在として描写されていることが浮き彫りになったように思う。副官称号の中から「觚」を取り出したこと、景初2年12月に明帝が書かせた詔書を本文として記録したこと、詔書中に倭国への称賛を現わす破格の下賜品を列挙したこと、おそらく直接的な軍功に関係したであろう使節団中の固有名詞をかかげたことなどが、その具体的な倭国への賛辞である。

書き終えて『邪馬台国はなかった』を開き、驚いた。実に既に「東夷伝序文」を全文取り出していた。僭越にもこうして書いてきた私は、気がつけば、古田武彦先生の掌の上でオドッていたに過ぎないと知った。

〔参考文献〕

ちくま学芸文庫版『正史三国志』

上海博物館刊『中國古代青銅器』

古田武彦著『倭弥呼』ミネルヴァ書房